蔵王山安善寺

◆編集・発行人◆
近藤龍弘
〒940-0052
長岡市神田町1丁目4番地10
TEL.(0258) 32-2811
◆スタッフ◆
小林国二 小林善秋 高橋潔 加瀬由紀子
室賀清輝 近藤マリ子 近藤善信
後援・株式会社アサヒ
印刷・(株)北越時報社

二月九日に行われた「初午」

ご家族の皆さまでご覧ください

いくつになっても青春の人生

翠巌 龍弘

三寒四温、雪国長岡にも春は足下までやってきました。端唄に「梅は咲いたか桜はまだかいな…」とありますが、安善寺の境内では二月下旬頃雪囲の中で椿が咲き、彼岸には梅が咲き始め、満開の頃隣の公園の桜が咲き始めます。梅と桜が同時に見られまさに春がいっぺんにやってまいります。

安善寺の行事も二月の初午が終わると、三月十五日の涅槃会・同十七日の彼岸入り・二十日のお中日・廿三日の彼岸明け法要と続き、四月からは朝の坐禅会や写経会が再開され、五月五日には仏教会主催の花まつり（お釈迦様誕生を祝う日）同十一日～十三日まで安善寺親睦旅行（奥の正法寺参拝とみちのくの旅）・同廿八日は第三回KAKA笑の会・六月十二日の大般若法要とつづくように、三月の声を聞くと同時に雪国長岡では、いっぺんにフル回転の忙しい日々に身を置く事になります。

故・安藤一夫初代編集委員長の発願により平成十年三月七日第一号として発刊された「季刊　蔵王山安善寺」も、現・小林国二編集委員長はじめ編集委員の方々の献身的協力、読者の皆様の御協力により七年目に入り、廿五号発刊となりました。安藤氏の三回忌の年に当たり、創刊号から前回の廿四号まで改めて読み直してみましたが、いかに多くの方々から原稿をお寄せいただいたか、氏の願いどうり季刊誌を通して、安善寺が壇信徒の皆様方から身近な存在になる事が出来たか再認識させられました。

季刊第六号で氏は幻の詩人サムエル・ウルマンの「青春」を紹介しております。『青春とは人生のある期間ではなく、心のもち方をいう。時には二十歳の青年より六十歳の人に青春がある。年を重ねるだけで心は老いない。理想を失うときはじめて老いる。歳月は皮膚にしわを増すが、熱情を失えば心はしぼむ。人は神から美・希望・美悦・勇気・力の霊感を受ける限り君は若い。頭を高くあげ希望の波をとらえる限り、八十歳であろうと人の青春は始まる』と。

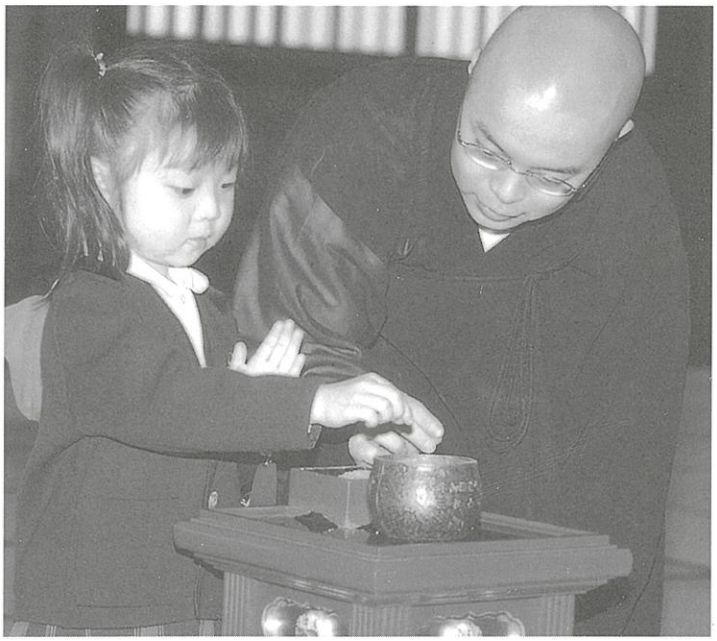
そして氏は「これからは、仕事と遊びながら、充たされた愉しい生き方ができたらいいかなと思います。」とむすんでおりました。安藤氏は人生の最後まで、青春の人生だった様に思われます。

多くの草木が萌え出て、無辺の春光が輝いて春を現じる季節を迎え、私共も明るい日本となる様、青春を現じたいものです。

【大本山總持寺　雲水日記】

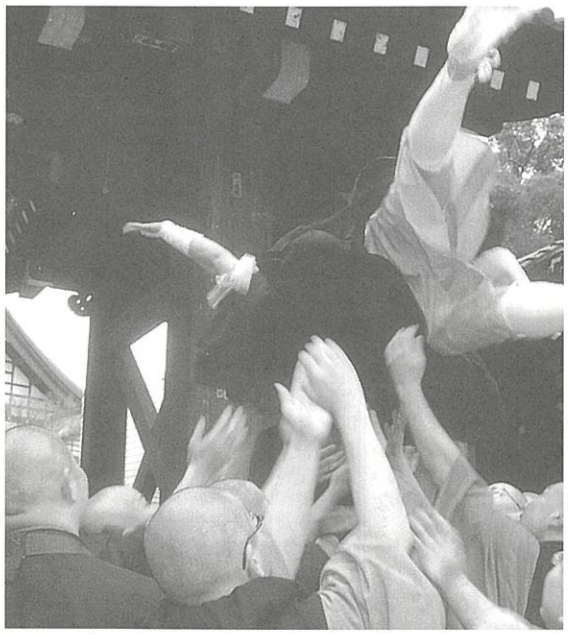
一緒に生活した同安居は一生の宝

近藤 真弘



總持寺にもこの時期になると学校でいう新入生（新到）が入ってきます。僕が三年前そうだったように、新到は二月の中旬から三月いっぱい、四日間おきくらいに数人づつ上山します。僕が上山した平成十三年度は、三月九日に上山した僕がだいたい真ん中ぐらいで、全部で約七十人上山しました。年齢は、上は四十歳位から、下は二十歳までと離れており、一緒に入った約七十人は「同安居」となり、歳の差など関係なく今までの生活では体験したことのない集団生活が始まりました。しかも、ただの集団生活ではなく、辛い修行生活での寝食を共にする生活であり、お互い助け合い、励まし合い、とても貴重な仲間ができました。

僕が新到のとき、上の人がよく「同安居は一生の宝だ」と言っていました。確かに今だけではなく、修行を終えて、それぞれがこの先僧侶を続けていく上で、一緒に厳しい生活を乗り切った仲間はお互いの支えになってくれると思います。



今現在、僕の同安居で本山に残っているのは十五人ほどです。丸三年で五十人ほど送行（修行を終えて本山を下りること）しました。修行の期間というのは学校のように決まっている訳でもなく、送行するのに単位のようなものが必要という訳でもありません。ただ自分の家のお寺を継ぐのに、ある程度決まった期間修行しなければいけませんが、家の都合や、下りてから就職するためなど、いろいろと理由があり、安居期間は様々です。中には十年近く、それ以上いる人もいます。

ここ總持寺で修行僧が送行するときには、必ず皆で見送りをします。送行するものは上山するときと同じ托鉢の格好に草鞋を履き、まず香積台という建物の玄関で見送りに来ている皆の前で挨拶をします。そして花束をもらい、山門の下まで見送られるのですが、見送るほうは三百メートルくらいの距離を常に先回り、先回りして人の壁を絶やしません。ずっと皆の拍手で見送られ、最後「三松関」という門をくぐると送行者は順番に同安居の手によって胴上げされます。多いときは一度に二十人位送行するときもありますが、その皆が順番に胴上げされ、笑顔で總持寺を後にします。

僕はまだいつ送行するか分かりませんが、自分自身が納得するところまでやり、笑顔で自信を持って安善寺に帰れるよう、残りの修行生活を精進していきたいと思います。

豊かさの管理とは

長岡市国際交流センター　センター長　羽賀 友信

近頃、新聞に虐待の記事が載る事が多くなっています。特に子供に対し暴力を振るう虐待。他には、子供の養育を放棄する虐待。しかし、明確な表現で記事にはなっていないが、子供が成長する為に必要な三つの要素、「感じる」「考える」「行動する」の内の二つの要素で「感じる」「考える」を取り上げている記事が増えて来ています。

絶対に失敗をさせず、子供が行動する前に親がやってしまう。こうして育てられた子供は、小学生の内は親に言われた事だけを無気力にやる「おりこうさん」になるが、自我が芽生える中学生になると「判断力の無い」又、親が全てやってやる為に、出来ない自分を受け入れられず劣等感をプライドに変えた所謂「切れる子供」が出来上がってしまうのです。これは正に「過保護と言う虐待」ではないでしょうか。少子化が益々進むとこのケースが増えて来ると懸念されます。

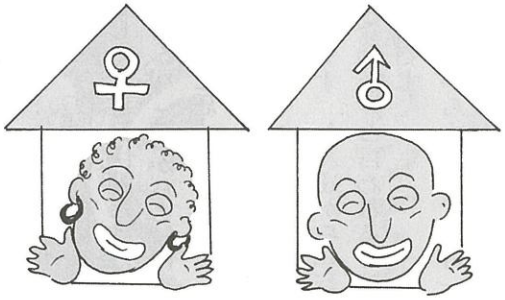
二年ほど前から、パプアニューギニアの奥地で学校を支援するプロジェクトを行なっていますが、首都ポートモレスビーから国内線で第二の都市ラエに行き、更に船で一日半海を走り、川をさかのぼってようやく行き着くジャングルの中の集落なのです。勿論、道路・電気・水道・お店など一切無い所なのですが、何と人々は生き生きしていることか！

私達が到着した時に現地の人に言われたことは「援助は有り難いが、文明は熱いお湯と一緒です。ゆっくり飲むと美味しいですが、慌てて飲むと大火傷をします。それを理解して下さい」と言う言葉でした。これは現地の学校の校長先生の言葉でしたが、ご自身は学校の無い所から出て海外留学をして先生になられているそうです。その時に文明の便利さを知りましたが、文化の持つ大切さに気付き故郷に戻られたそうです。

この集落では男の子も女の子も八才になると「男の家」「女の家」に親以外の大人と生活を始めます。全て時給自足の生活なので、火の起こし方・食物の見分け方・道具の作り方・カヌーの作り方等、生活の方法を全て習得したと認められると成人式を行なってもらえます。この成人式は年齢ではなく、能力で時期が決まります。

他方、日本では荒れる成人式が問題になっていますが、自立出来ず・自覚もない人間が自動的に二十才になると成人式をしてもらうと言う矛盾！　これは「自立」と言うテーマのない社会教育の問題だと思います。

私は大きく分けると、人間には二つの生き方があると思います。一つは「人を生かして自分も生きる」これを「社会」と呼びます。もう一つは「自分だけで良い生き方」これは「孤立」と呼びます。人を生かすことを考えた時に自分が生まれて来た意味が分り、人間としての使命感が出来ると思います。



よく子供達に夢を聞くときに「何になりたいの？」と言うことが多いですが、何になるは目標であって、人生の通過点だと思います。その先に「どんな人間になりたい」と言う上位目標・未来形が見えた時、本当の夢が持てるような気がします。私の海外の友人には学校が無い所から出て大学を卒業した人達が多々おります。彼等に共通しているのは「これしかないと言う哲学」です。首席になって奨学金をもらうか、無(む)しかないギリギリの状態から生まれた哲学。その友人が良く言うのが「貧しさの管理より、豊かさの管理の方が難しい」と言うことです。

私達は子供達の「当り前意識」をどう壊してやれるかが課題だと思います。

・・・・・・・・・・・・・・

今回は友人の羽賀友信氏に原稿を依頼しました。彼は講演やら子供達との触合いやら、海外留学生の世話相談と多忙の中、快く書いて戴きました。問題提起のようになったかなと笑って言っていましたが、考えさせられる問題を多く含んでいる内容になったと思います。読者の皆様の感想をお寄せ戴ければ有り難く思います。(国)

羽賀友信　五十三歳　現在、長岡市国際交流センターセンター長・沙漠家　自然塾塾長・にいがたNGOネットワーク理事長・長岡市教育委員会委員・独立行政法人国際協力機構東京国際センター(JICA東京)所属・国際協力サポーターを歴任。

読者からの便り

平和で明るい二〇〇四年であるように

長岡市●小林十代次

昨年は冷夏であり日照不足で大変だった、米相場は少し高騰したが収穫が少なかったので生活は楽でない。

十一月二十二日法要あり、小雨降る肌寒い日であったが、魚石さんの車で安善寺様に行き、お庫裡にて小休後、本堂でありがたいお経を上げてもらい供養していただいた。いつお参りしても広々とした本堂正面の本尊釈迦牟尼佛様の慈愛にみちたお顔を拝見し思わず頭が下がる思いである。

読経が終り、方丈様の法話の中で故人を偲び、いろいろの法話がなされた。偉大な人であったのだと思う、人には優しく又厳しさもあった。私より一回り先輩で同じ羊なので、うまがあいよく指導してもらった。

若い時は徴兵で軍隊に行き、海外にも出兵し、戦争で苦労をしたとも聞き、戦後復員し、農業の傍ら他産業にも協力し家系を守ってこられたのは昨日のような思い出がある。親父さんが亡くなってから早いもので七回忌となった。

戦争では尊い生命を失い、それぞれの国を廃墟とし、得るものは何も無く苦しむのは一般国民だけだといわれた。その国民は六十年前に「戦争は絶対にいたしません」と誓った夢は破れ、小泉首相は憲法違反論議のある中、自衛隊を派遣するという「戦争に行くのではない、イラクの復興の為の人道支援」といわれるが、私は自衛隊の派遣には反対である。それよりも一日も早く拉致家族の皆さんが日本に帰られる事を解決すべきであると思う。

先日、タケシの「TVタックル激論二〇〇四年」で拉致議連事務局長の平沢勝栄さんいわく、「北朝鮮は家族を日本へ戻す意志はある、と云はれたが果たして北朝鮮の真意は何か。日本国民が納得できるような誠意がある対応をみせるかどうかにかかっている。日本は焦ることなく、経済制裁などのカードをつくりながら対応を続けて行くべきだ」とかたられた。

季刊誌発刊の春三月、桃の花が咲く頃、拉致問題が解決し国交正常化交渉が進展する事を祈っておるのは私だけではないと思います。

見守り続けてください

長岡市●金子貴明

早いもので母が亡くなって、丸七年が過ぎました。母との思い出も毎日の仕事に追われて、少しずつ忘れており、母がだんだん高く、遠くに離れていっているのではと感じ始めております。

お盆・お彼岸・正月と、年三・四回お寺にお墓参りするのが現状です。忙しさにかまけて、少々反省しております。

仕事で施主との契約や、入札など、重要な日だけいつもよりしっかりとお参りし、自分の願い事ばかりで、「苦しい時の神頼み」ならぬ仏頼みが多くありました。

これからも私達夫婦と姉夫婦・甥っ子・姪っ子達を見守り続けていってくださいと、純真な気持ちで素直に毎朝手を合わせて行きたいと思います。

健康が宝です

長岡市●日野幸子

主人が亡くなって九年を迎えます。昨年、私も還暦を迎える年になり、年のせいか腰や足が痛くなり、長年務めた会社を退職いたしました。私の人生これからだと思っている矢先の出来事です。

色々と考えた末、私の健康の源はウォーキング三十分、時にはプールで一時間位歩くことです。私の身体に合うらしく、毎日快調とは言えませんが、これからも続けてみようと思っています。

自分ながら、肌もなんとなく美しくなったような気がします。お友達から「若くなった」と言われると嬉しいです。

これからも元気で一日一日、楽しく過ごしていきたいと思っております。健康は宝です。

お別れ

（平成十五年十二月末～十六年二月末）

渡部房子様　十二月廿九日寂
東京都板橋区

●

熊倉廣美様　一月八日寂
長岡市中島

●

安藤キセ様　一月廿三日寂
長岡市今朝白

●

本間重雄様　一月廿九日寂
金沢市山王町

●

小池昭司様　二月一日寂
長岡市緑町

●

寒川正美様　二月十七日寂
長岡市長倉

●

近藤益二郎様　二月廿六日寂
長岡市柏町

ご冥福をお祈り申し上げます。

YE生の受け入れ

長岡市●高橋利春

今年から皆様のお仲間にしていただいた高橋です。どうぞよろしくお願い致します。まだお墓はありませんが場所を決めさせていただいたところです。

ライオンズクラブの関係で、我が家のお正月にペルーから二十二歳の医大生をホームステイで迎え入れましたので紹介いたします。

クラブでは若者に海外体験をさせようと、毎年受け入れと送り出しをしております。十一年前には娘がオーストラリアへ行かせて頂きましたが、我が家での受け入れは今回で三回目で、いずれも希望通り女性ばかりでした。今回の学生は五～六年後には心臓外科医になりたいという大変明るく素直な娘でした。

私も妻も英語は全く話せないのですが、辞書や電子手帳を使って英単語と身振り手振りで何とかなるものです。二人きりの家族に娘が一人出来たようなもので、若返った気分でお正月を過ごしました。十二日間でしたが、途中安善寺様で坐禅・抹茶の体験をしたり、食事に招待いただいたりして過ごしました。お寺の「さくら」はとても大きな犬でびっくりしていたようです。

外国人の受け入れというと食事等も不安になり、どうしょうかという事になりますが、訊くと魚介類・野菜・果物が大好き、肉は腹痛を起こすとの事。特に牛肉は苦手との事。我が家の大晦日は「牛のすき焼き」と決まっています。妻が「どうする？」と心配していましたが、恒例のすき焼きを変えるわけにはいきません。「鶏肉でも入れて作ってやれ」と言って一人前だけ別に盛って、皆で楽しく牛のすき焼き鍋をつっつき始めたら、彼女は一口鶏のすき焼きを食べ、こちらの鍋を食べたそうにしているではありませんか、それはそうです。霜降りのすき焼きと鶏では味が違い過ぎる。「食べてみる？　牛肉だよ？」と言い誘ったらドンドン食べるではありませんか。「お腹は大丈夫か？」と訊ねると大丈夫との事。ご飯も嫌いだったが焼飯・栗おこわ・餅まで食べて「持って帰る」とお餅をお土産にしてしまいました。何が嫌いなのかさっぱり解かりません。「日本に来て四週間で三キロも太ってジーパンが入らなくなる」と言って夕食はミルクだけにして下さいと泣きを入れる始末でした。こんな事でYE生を交えた楽しい新年を迎える事が出来ました。

皆様も機会があったら受入等、如何でしょうか。

第三回『KAKA笑の会』五月二十八(金)開催

精進料理を味わってみませんか

近藤マリ子

昨年の今頃から動きだした「KAKA笑の会」も三回目を迎えることになりました。次回は五月二十八日(金)午後六時半から、大本山總持寺で典座和尚(てんぞおしょう)を勤めておられる小金山泰玄(こがねやまたいげん)老師にお運び頂き、本山の精進料理を作っていただく事になりました。

昨年十二月本山は摂心(せっしん)中で、朝から晩まで坐禅が行われ緊張感の漂う雰囲気のさなか、実行委員三名でお願いに伺いました。

ご老師は、近年静かなブームになっている精進料理で昨年NHKの「生活ホットモーニング」等に何度か出演された方だったので、お会いする迄は緊張していたのですが、お会いした途端に緊張が一度にとれてしまいました。私達の話を少しお聴きになっただけで「胡麻豆腐だけ本山で作ったものを持って行ってあと二、三品そちらで用意して下さった材料を見てから百食分作りましょう」と、いとも簡単に私達の望み以上のお返事をいただくことが出来ました。

ご老師は「メディアの力は凄いですね！　テレビに出てから問い合わせがとても多くなりましたが、私の料理はレシピを持ちません。料理は舌で覚えるものだと思っているからです」ともいわれました。

そんなご老師が作られるお料理を少しでも多くの方に味わっていただくと同時に、講演を通して餓食の時代を見直し、改めて「禅」から学ぶものがあるのではないでしょうか。

夫、安藤一夫の三年忌に寄せる想い

安藤 詩枝

早いもので夫、安藤一夫が旅立ってしまってから六月五日で二年の月日が流れようとしています。瞬く間の二年間でした。

主人は、私にとって大きな存在。人一倍ピンピンして仕事、そしていろいろとやりたい放題のことをやっていた夫が病に伏した時は、胸が痛み、路頭に迷いました。この人に死なれたらこれからどうしたらいいのだろうと思いました。

私は本当に人間がのんきとみえて、夫が死ぬなんて思ったことがなかったので、亡くなってみると、あゝやっぱり人間は死ぬんだなぁと思いました。

夫の強烈な思い出といえば…、料理に関することです。或る日、夫の会社の現社長の伊藤さんを交えて三人で食事をした時のこと。

私がシェフ。今日はステーキと意気込んで、最初ににんにくを炒めるのですが、焦がしてしまい、ウワァー失敗！　夫は「ハイ、やり直し！」と云い、この時は二人の前で料理をしたものですから真剣勝負。黙ってやり直す私…。どうにかこうにか上手にステーキを焼くことが出来ホッとする。次に味噌汁。いくら味噌を入れても「味がない」と云い、遂にはものすごくしょっぱい味噌汁の出来上がり。夫は「うまい！」、伊藤さんは黙って味噌汁に手をつけない…。今になって思えば、その時は投薬のせいで味覚が全く麻痺していたようでした。分かっていたのだが、私への思いやりで口には出さなかったのでした。

人をお招きすることが好きだった主人は、事あるごとに自宅に人を集めての食事会。自らメニューを決定し、自らキッチンに立つ。料理の本をたくさん買ってきては挑戦する姿は、今でも脳裏に焼きついております。お陰であの料理、この料理、おまけに漬け物の漬け方の本と、料理の本には不自由しません。今では私の大切な財産となっています。そして、いろんな料理の体験をさせてもらって感謝しています。

多くの人達と食事をして、主人は今もきっと天国で料理を作って、みんなで食べていることと思います。やりたいことをやってきた主人は幸せだったと思います。

今の私は常に「人生は自分が主役」。自分のこれからの道と、夫の思いの道を捜しながら生きることにしたいと思っております。

年令を重ねることは喜びとし、若い日とは比べようもない心の豊かさと平安があると信じて止まない…。

合掌

旬歌 愁灯

［その四］巴里野郎（シャンソン）

加瀬由紀子

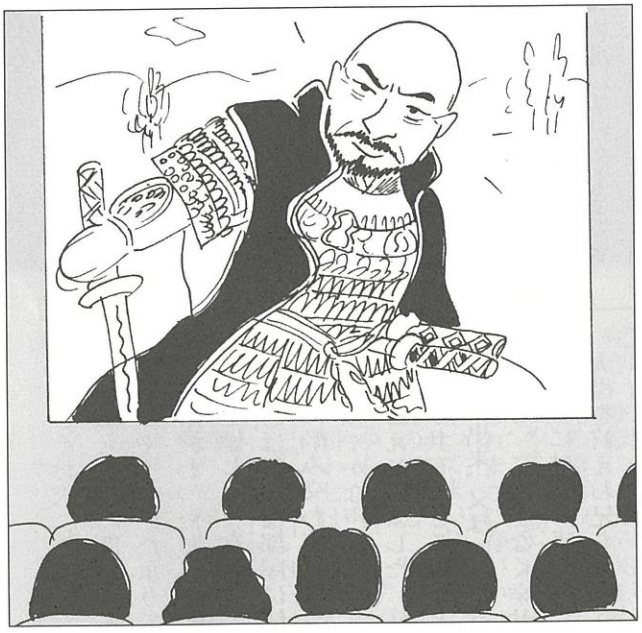
日頃、映画に関心のない友人が「感動した！」とふれ回っている。真偽を確かめに別の友人と映画館へ足を運んだ。「シネコンは迫力ありますよ、一回行ってみるといいですよ」などとわが社の映画好き社員の勧めもあっての三条訪問である。

黒澤明とヴィスコンティと仏映画を崇拝する私にとって大画面で映画を見るのは数年ぶりのことだ。「眠くなったら寝てもいいからね。イスも楽な造りだし。二時間半は長いもんね」エエッ、二時間半だって？　事前に調べておくべきだったと後悔するが、もう遅い。

かくて『ラストサムライ』は始まった。なんと言っても音響が素晴らしい。「スゴイ！　帝劇でシネラマ観た時を思い出す！」「…」隣人は無視して話題を変える。「渡辺謙は新潟の出身で、アカデミー助演男優賞候補なんだよ」。彼女が詳しいのは、同郷のよしみという点だったのか、と納得。「新潟のどこ？」「北魚沼」「そのどこ？」「ん…合併するからまあいいじゃん。迷惑になるから黙って観ようよ！」。こんなところにも合併の話題は出てくるんだなあ、と感心しているうちに私の瞼も合併しはじめた。

結局、大音響にも関わらず合併はうまくいったようで、友人もあきれ顔だった。「渡辺謙よかったね！」「でもトム・クルーズの添え物に過ぎないなあ」「あんた寝ててもわかるの？　あの戦闘シーンすごかった」「『乱』の戦闘場面は芸術の域に達してたなあ」「…」「色彩は『どですかでん』にはかなわない」「…」「やっぱ、私はクロサワ映画がいいなあ！」「…」という訳で気まずく帰途についたのであった。

映画をよく見たのは中学生の頃である。仕事で上京する父の車に同乗、ロードショーを観にでかけたものだった。丸の内ピカデリーで観た『ウエスト・サイド



で。初めてのシネラマの迫力に圧倒された。一日に五本観た日もあって、いつの間にか貯まったプログラムは二百近くになっていた。

当時、学校の図書館を根城としていた早熟な中学生は、「ボッカチオの『デカメロン』はきわどい描写あり」「井伏鱒二は渋い。中庭側の書棚の日本文学全集、しおりのはさんだページを見よ」などと映画、文学、教師の論評などを『週刊東北（中学）の友』として発行。『映画の友』をもじったのだが、どうやらこの頃から編集記者への道は決まっていたのかもしれない。

亡父の映画好きも相当だった。ツイードのスーツを着た三十代の父と着飾った着物姿の母に手を引かれ、浅草の映画街をうきうきと歩いた日のことを思い出す。オールバックに固めた父のポマードの匂い。まだ若かった母の白粉の香り。「何を観ようか？」楽しそうに母に語りかけた父…浅草は迷宮のように幾つもの映画館が並び、活気があった。

その時観た映画は、小学生には全部は分かりかねたが、大戦間近の悲恋ものだった。父は後年、その仏映画が『凱旋門』だと語ってくれた。中学の図書館でレマルクの『凱旋門』を手にした時の喜びは、例えようもなかった。

記者時代、新宿の名画座で『ヘッドライト』を観た。何本も雨のようにかすれた線が走る古い画面。ジャン・ギャバンが人生の黄昏を切々と演じ、胸を打った。『巴里野郎』も観た。いかにもフランス映画らしい洒落たラブ・コメディ。孤高のビスコンティ作品も観た。

今年も二月のある夜、私が代表を務める「ル・ヌーヴォーわいんの会」に、シャンソン歌手美海ゆみ子さんからおいでいただいた。軽妙洒脱に歌う『巴里野郎』に、手伝いに来ていた我が娘が「『巴里野郎』一番いいね！」と言う。彼女が訪れたパリの人懐っこさを思い出す、というのだ。今年のわいんの会は「追憶の欧羅巴（ヨーロッパ）」と題して、映画音楽とワインで佳き時代のパリに還るプログラムであった。この会も重ねて二十回目となり、最後は再びパリにもどった訳だ。

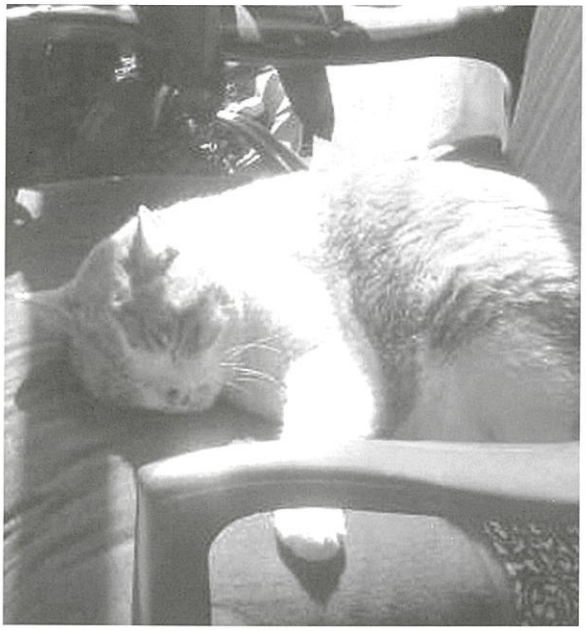
その歩みを振り返り、「仏映画と黒澤とヴィスコンティ！パーフェクト！」仏ワインの酔いが心地よく私たちを包んでいった。

第二十六号、夏号は平成十六年七月七日(水)発刊予定です。

ペコ大蔵日記
パートⅡ

難しいことは解らないけれど…

ペコのひとりごと



二月の中旬なのにこんなにお天気が続いたのは珍しい事です。三日も雲ひとつない青空が続いたので墓地や庭の雪も大方解けてしまいました。私はめっきり足が悪くなってしまいましたので、ようやく顔を出した草花の臭いを嗅いだり暖かい石の上に寝転んだりしていましたが、お母さんはお花を植えたくてうずうずしてる様子ですが、まだまだ雪国はわからないのです。今日も夕食を食べ始める頃になったらバシャバシャと凄い雨の音がしたと思ったら、ゴーゴーと物凄い風の音…、春はまだ遠いようです。

今月に入って間もなく、今年で修行四年目に入るお兄ちゃんが九日間程帰ってきました。ご本山に行ってからこんなに長く帰って来るのは始めてです。

私は難しいことは解からないのですが、安善寺の跡を継ぐ為には傳法(でんぽう)という儀式をしなければならないとの事。夕方遅く帰宅し翌朝にはお衣に袈裟を着けて住職と一緒に本堂の各佛様にお線香をあげお拝をして廻り、その後は奥の部屋に閉じこもって、毎日毎日何やら難しいものを書いていたようです。

私は勿論ですが誰も部屋に入れないというので見る事が出来ませんでした。聴くところによると半切(はんせつだい)大位の大きさの布三枚にびっしりとそれぞれ違うものを筆で書かなければならないとか…。お兄ちゃんが書き終えた後に住職が何かを書き、きちんと畳まれ(一度解いたら畳みなおすのが大変!)、その後、この儀式を始めた時と同じくお衣に袈裟を着けて住職と長い時間寒い本堂で何かやっていたようです。無事終わったお兄ちゃんの何と嬉しそうな顔…。

いつもは静かな部屋に住職と共に酌み交わすお兄ちゃんの和やかな声が何時までも聞こえていました。住職も話が共有できる息子と飲む事が出来、又ほっとする事もあり、この上なく幸せそうに私には見えました。

大役を終えお兄ちゃんはご本山に戻って行きましたが、あと一年位は修行生活が続くようです。

編集雑感

まずは編集スタッフ、取分け編集担当の近藤さんにはお詫びしなければなりません。と言うのは安善寺の奥様より「原稿の締切日過ぎていますが、まだでしょうか?」との電話、「エー!」頭の中は真っ白、今回の編集委員会は欠席だったので、すっかりこの編集雑感の担当を忘れてしまっていた。少し時間を頂き何とか間に合うようにと言う事で書き始めたが、急いでいる時は何を考えてもダメな様で時間ばかり過ぎてゆく。誰のせいでもない、自分のせいと思いつつ今後はこんな失態を繰り返さない事を肝に銘じ、責任をもってやろう。(反省)

さて本年は少雪ではあったが、二月に入り寒暖差の多い日が続き、特に一日で十度くらいの差があった日もあり、高齢の方々や体の弱い方には厳しい日々だったのではないでしょうか? お互いに健康に気をつけて毎日楽しく過ごしていきましょう。

又、今年は私ども「建設業」にとっても少なからず影響がありました。雪が消えて土が顔をだしたと思ったら又、翌日は雪が積もりと工事の予定が立てにくく、仕事のリズムが狂ってしまう現場もあり、いっそ昔みたいに三月まで雪が積もっていたほうがゆっくり出来てよかったのに、なんて思いながら天気予報とにらめっこの毎日です。

少し愚痴っぽくなってきたので話題を変え、最近はこの季刊紙への投稿も少しではありますが増えて来た様に感じ、有難くおもっております。私も編集会議の日は何とか都合をつけて出席し少しでも役に立てればと思っています。この季刊紙は、皆様の投稿により支えられておりますので投稿よろしくお願い致します。小林善秋

お便り原稿用紙

季刊誌では、壇信徒・読者の皆さまと、ごいっしょに誌面をつくりながら、コミュニケーションを深めたいと思います。
ハガキまたはお手紙、ファックスなどで、お気軽にお便りをお寄せください。お待ちしております。

原稿の例
- ●思い出話/ご家族、ご先祖、お寺の思い出話など。
- ●私に言わせて/家事や子育てのお話、身近な出来事など。
- ●教えてください/仏事のしきたりや疑問(編集部や住職がお答えします)など。
- ●嬉しい・楽しい/嬉しかったこと、楽しかったこと、悲しかったこと、怒ったこと。